

# 經濟論叢

第101卷 第2号

---

資本金論の一批判 (1).....	岡 部 利 良	1
部門連関バランスの諸形態と 固定フォンド (1).....	野 澤 正 徳	20
現代アメリカ農業の資本主義的性格 .....	中 野 一 新	41
労働經濟論の方法 .....	小 川 登	64

---

昭和43年2月

京 都 大 學 經 濟 學 會

昭和二十七年十二月一日 第三種郵便物認可  
昭和二十四年六月三日國有鐵道特別承認雜誌第一九九号  
昭和四十三年二月一日発行(毎月一回一日発行)

# 現代アメリカ農業の資本主義的性格

—U. S. Census of Agriculture, 1959 の分析 (1)—

中 野 一 新

## はじめに

### (1) 問題の限定

現在、資本主義諸国において急速に深化しつつある「農業危機」を前に、農業の現状と将来をめぐって、マルクス主義者、非マルクス主義者とわずさまざまな見解が提起され、無数の論争が国際的にも国内的にも展開されている。これら現代資本主義社会における農業の諸問題をめぐり、いりくんだ論争は、究極のところ、現代農業の進化の方向・型・性格・法則とはなにかという間に帰着する。さらにその核心は、今日、資本主義社会の農業は、資本主義的進化の道をなおりつつあるのか、それとも他の何ものかに向いつつあるのか、という間にあり、いわばかの小農論争<sup>1)</sup>以来の問題の新段階における再燃であるといつてよい。

われわれの分析の課題は、現代アメリカ合衆国農業の実態の考察を通して、この間に答えるための実証作業の一步をすすめることにある。

かつて、レーニンが論文「農業における資本主義の発展法則についての新資料、第一分冊、アメリカ合衆国における資本主義と農業」<sup>2)</sup>(以下「新資料」と略)

1) 周知のように、19世紀末から20世紀初頭にかけて、資本主義社会における農業の進化の法則をめぐり、国際的な大論争が行われた。カウツキーはじめマルクスの理論をうけつづ「正統派」に対し、E. ダビッド、C. H. プルガコフ、F. ヘルツ、M. ヘヒト、H. H. ギンメルなど一連のいわゆる「小農論者」は、マルクスの農業理論を批判して、農業における小経営を讃美し、大経営に対する小経営の「優越性」を主張した。彼らは農業における資本主義の一般法則を否定し、あたかも農業は自然的影響力が大きく、「収獲遞減の法則」によって発展するとか、小経営の方が勤勉や節約により持久力があるので、資本主義の大経営は崩壊し、小規模な勤労的農業が支配的になりつつあると主張した。レーニンは「農業問題と『マルクス批判家』」(『レーニン全集』第5巻所収)、その他多くの農業問題関係の論文で、「小農論」を徹底的に批判しており、「新資料」もその代表的な論文のひとつである。

において、1900年と1910年のセンサスを素材にアメリカ農業の資本主義的發展の傾向を検出し、当時のいわゆる「小農論者」H. H. ギンメルによるアメリカ農業の非資本主義的進化論を徹底的に批判した。その際、レーニンは結論を次の五つの命題に集約している。① アメリカ農業の進化の過程で賃労働の使用が増大しており、② 機械の使用もまたたゆみなく前進している。しかし、③ 農業生産は、地域や農耕上の特殊性あるいは時代の特殊性により、不均等に発展している。(とくに商業的農業の成長が著しい。)④ 生産の集積・集中をつうじて小経営は大経営に駆逐され、資本主義の一般法則が貫徹している。⑤ 農業の資本主義化がもっとも進んでいる東北部が、アメリカ農業の最先進地域である。

ところで半世紀を経過した現在、レーニンによって検出された法則は、なおアメリカ農業を規定しているだろうか。

今日では、農業の非資本主義的進化論が新たな論拠と装いで登場し、わが国では漸次支配的となりつつある。その代表者の一人と目される大内力教授によって、右の問に対する一つの回答が提出されている<sup>3)</sup>。大内教授の見解を簡単に要約するところである。現代のアメリカ農業においては、① 賃労働者は次第に駆逐され、家族農場 (family farm) 経営が支配的になりつつある。しかし、② 農業の機械化は急速に進んでいる。——これによって賃労働者の駆逐は一層促進される。③ 機械化による農業生産の発展過程で地域的な特殊性がうすれ、全国的に均質化していつている。④ 以上三点の特徴は、帝国主義段階という時代的制約に規定されたものであり、要するに、現代のアメリカ農業では資本主義の一般法則は貫徹していない。また、⑤ 家族農場経営が支配的な中西部こそがアメリカ農業の典型であり、農業生産の最先進地域である。

みられるように、大内教授にあっては、レーニンによる一般法則的見地は、

2) В. И. Ленин, Новые данные о законах развития капитализма в земледелии. I. Капитализм и земледелие в США, *Сочинения*, 4-е изд., т. 22, 邦訳「レーニン全集」第22巻。この著作の準備資料が *Тетради по аграрному вопросу 1900-1916, Сочинения*, 4-е изд., т. 40, стр. 419-488, 邦訳「レーニン全集」第40巻, 376-456ページに所収。

3) 大内力「アメリカ農業論」昭和40年。

現代アメリカ農業において現実性をもたないものとして、完全に否定し去られたのである。はたして大内教授の見解は正しいであろうか。この点を判定するためには、なによりもまず事実をして語らせるほかはない。

いうまでもなく、今日の「農業危機」・農業の運動法則の全体としての解明は、現代資本主義についての全構造的視野からでなければ不可能である。ここではさしあたり素材を「1959年アメリカ合衆国農業センサス」(*U. S. Census of Agriculture, 1959*, 以下 *1959 Census* と略) にとり、視野を農業内部に限定して分析を進めたい。したがって、そこから得られる結論は当然きわめて限定されたものであり、一定の抽象性をもつものである。しかし、こうした検討は現代農業の運動法則を解明するための欠かすことのできない基礎作業である。

以下われわれの報告は、次のようなものとなるはずである。I節ではできるだけ簡単にアメリカの三大地方とその九地域の一般的特徴づけをおこなう。II節では賃労働者の使用について検討し、III節では機械化の進展と農業の集約化の過程を考察する(以上本稿)。IV～VI節では農業生産の不均等な発展、とりわけ、集約的・商業的農業の急連な成長過程を分析し、最後にVII節で、農業生産の発展全体をつうじて大経営が小経営を駆逐し、生産の集積・集中を強めている事実を総括する(以上次稿)。

## (2) 資料とその限界

具体的分析に入るに先だって、資料の性格とその限界を明らかにしておきたい。

ここでとり上げるのは「1959年アメリカ合衆国農業センサス」である。

レーニンの時代以来、アメリカ農業センサスで最も興味をひくのは次の三分類——① 農場規模 (size of farm) 別分類, ② 農場の型 (type of farm) 別分類, ③ 経済階層 (economic class) 別分類——の比較・対照である<sup>4)</sup>。とくに、第二と第三の分類は非常に意義がある。第二の分類は各農産物による農業の進化の型・特徴を正確に比較できる。第三の分類は、アメリカのように作物や地

4) ①は土地面積, ②は主要販売農産物, ③は農産物販売額を各々基準に分類している。

域により集約度が大きく異なり、土地面積別分類では農場の規模を正確に表現できない国では、きわめて重要である。さらに、センサスはアメリカを三大地方と九地域に区分しているので、各地域の比較が可能である。本稿では、アメリカ農業の進化の過程を正確に表現する第二・第三の分類方法と地域別分類方法を採用する。

他の資本主義諸国にくらべすぐれた点の多いアメリカ農業センサスにも多くの欠陥があるが、ここでの分析に必要なかぎりでは指摘しておく。第一は、大経営の分類が不十分な点である。農産物販売額4万ドル以上の農場、賃労働者10人以上雇用の農場、トラクター5台以上所有の農場は一括して分類されている。第二に、1959年センサスは各種の統計上の定義変更を行ったので、1954年以前のセンサスとの直接比較が困難になった（とくに「農場」の定義変更による23.2万農場の脱落<sup>5)</sup>。第三に一般的な農業機械の統計はあるが、農産物ごとの特殊な農業機械の統計がないため、機械化の正確な状況が把握できない。

なお、1959年センサスで不十分な点は *Agricultural Statistics, 1959*, *Agricultural Statistics, 1960* の諸資料で補うことにしたい<sup>6)</sup>。

### I 三大地方とその九地域の一般的特徴づけ——1910年と1959年——

広大な面積をもち、国内各地の自然条件・経済条件が著しく多様なアメリカでは、農業の発展傾向を特徴づけるために、経営形態の異なる主要な地域を個々別々に分析することが無条件に必要である。

アメリカ農業センサスは、国内を北部・南部・西部の三大地方に大別し、さらに、それぞれを九地域に亜区分する分類方法を採用している。本稿では叙述を簡明にするために、特徴の類似した地域を一括し、以下の五地域に区分する。——北部はニュー・イングランドと大西洋岸中部諸州をあわせた東北部と、中部北東諸州と中部北西諸州をあわせた中西部の二地域。南部は三地域（大西洋

5) *1959 Census*, p. xxvi.

6) U. S. Department of Agriculture, *Agricultural Statistics, 1959*, Wash., 1960; *Agricultural Statistics, 1960*, Wash., 1961. 両資料で、最近における機械や賃労働者数の毎年の変化を補える。

岸南部諸州、中部南東諸州、中部南西諸州)をひとまとめにする。西部は山地諸州と太平洋岸諸州の二地域、ただし後者はハワイ、アラスカ両州をのぞく——。

レーニン<sup>7)</sup>は1900年および1910年センサス<sup>8)</sup>を分析して、この三大地方を「工業的な北部、かつての奴隷制の南部、および植民されつつある西部」<sup>9)</sup>と呼んだ。その後の半世紀間に、アメリカ農業が種々の重要な変化をとげたにもかかわらず、レーニンのこの規定は今日なお三大地方の基本的特徴を表現している。まず最初に、1910年と1959年の三大地方の一般的特徴を、のちの実証的分析の結論をもある程度先どりするかたちで概括しておく。

アメリカで最も古くから工業の発達していた北部は、農業でも優位を占め1910年にはアメリカ農業総生産の約6割を集中していた。現在でも農業生産の半分を担い、依然としてアメリカ農業における重要な位置を占めている。しかし、北部の中でも東北部と中西部の農業生産に占める地位は、過去半世紀間に大きく変った。

東北部は、かつてレーニンによって与えられた、最も工業的であると同時に集約的・資本主義的農業の最先進地域としての特徴を半世紀後の今日、穀作が少なく、野菜、酪農などの集約的・商業的農業が支配的であるという限りで、なお保持している。しかし、農業生産に占める比重はもはや一割に満たない(7.5%)。中西部は、アメリカの総土地面積の34%、総農場の約40%、穀類を中心に農業生産の40%強が集中しており、その意味で今なおアメリカ農業の一大中心地であり、レーニンの時代同様アメリカの「穀倉」地帯であるとともに、粗放的農業の典型的な地域でもある。

南部は、レーニンによって奴隷制の経済的遺制が多く残存し、農業の資本主義化が最も遅れている地方と規定されたが、今なお農業発展の後進地域である。もちろん同じ南部でも地域により農業の発展程度はかなり異なるが<sup>9)</sup>、全体と

7) Department of the Interior, *Twelfth Census of the United States, 1900*, Wash., 1902; Department of Commerce, *Thirteenth Census of the United States, 1910*, Wash., 1913.

8) レーニン「新資料」8ページ。

9) 南部の代表作物—綿花以外にも、大西洋岸南部諸州のタバコ、フロリダ州の野菜・果物生産など早くから集約的農業も発展している。

しては綿花を中心に少数の大プランテーションと圧倒的多数の零細経営から成りたっている。アメリカの農場総数の4割以上が集中しているのに、土地面積と農業生産はともに3割前後しか集中しておらず、南部農業の零細性を示している。しかし、近年の南部の工業化と農業の急速な機械化は、奴隷制の大プランテーションとその基礎をなすシェア・クロッパー (share-cropper) を急速に駆逐し始めている。

最後に西部は、レーニンによって「植民されつつある西部」・「自由な西部」と規定されたように、ホームステッド法 (Homestead Act)<sup>10)</sup>によってほとんど無償で土地を占取できた地方である。封建的な関係がほとんどなく、歴史的にみて豊富で自由な土地をもつこの地方、とりわけ山地諸州は粗放的農業の典型地域である。1920年代までにいわゆる西漸運動 (Westward Movement) は大体完了したが、現在でも相対的に地価は安く大経営が多い。しかし、同じ西部でも二つの地域の農業発展の形態は全く異なる。

山地諸州は広大な面積を利用した放牧農場 (ranch) が中心で、全国のわずか4%にあたる農場が総土地面積の約4分の1を集中しており、粗放的な大経営が圧倒的に多い。

カリフォルニアを中心とした太平洋岸諸州は、レーニンの時代にすでに資本主義経営の地域であった。この地域は第二次大戦を契機とする太平洋岸への大工業の進出とそれによる都市の急速な発達、運輸手段・冷凍技術の発達による東部市場への進出などにより、農業生産は急速に成長した。後に見るように、今や商業的農業を中心としたこの地域は、東北部を完全に追い抜き、アメリカ、否、全世界で農業の資本主義化の最も進んだ地域になっている。

## II アメリカ農業の資本主義的性格——賃労働者の使用——

アメリカの三大地方とその九地域の一般の特徴を概観したので、次にその経

10) 政府が無償かあるいは名目的な代価をとって分譲する地所で、大部分一農場当り160エーカーぐらいの規模である。

経済学的観点からする内容を具体的資料にもとづき検討することができる。

まず賃労働の分析からはじめよう。機械・肥料などの資料はいずれも農業における資本主義的関係の間接的な指標であるが、賃労働者の使用はその最も直接的な指標であり、「農業における資本主義の主要な標識」<sup>11)</sup>である。資本主義的生産関係の最も本質的な特徴である賃労働が現代アメリカ農業でどれ程に使用されているかを明らかにすることは、アメリカ農業の進化の性格・方向を解明する上で決定的に重要である。

### (1) 農業生産の賃労働者への依存の増大

最初に賃労働者の動向をみておこう(第1表)。アメリカの総人口および有業人口は、西欧にくらべて急速に増加しており、この百年間に人口は3,144万人から17,932万人へと6倍近くになっている。これに対して農業従事者(賃労働者と家族労働者を含む)は、レーニ

第1表 農業従事者の年次別変化  
(単位 万人)

年度	総人口 (A)	総有業 人口(B)	農業従 事者(C)	C/A	C/B
1860	3144	1053	621	19.7%	58.9%
1900	7599	2907	1091	14.4	37.5
1910	9197	3737	1159	12.6	31.0
1920	10571	4243	1145	10.8	27.0
1930	12278	4883	1047	8.5	21.4
1930	12278	4859	1016	8.3	20.9
1940	13167	5174	883	6.7	17.1
1950	15133	5902	686	4.5	11.6
1959	17932	6799	409	2.3	6.0

1959年センサス、p. 229より作成。  
1930年以前は10歳以上の人。  
1930年以降は14歳以上の人。

ンの分析した1910年をピークに減少しており、現在では当時の半分以下(409万人)である。総人口に占める農業従事者の割合は、1860年には約20%だったが、年々減少し百年後の現在ではわずか2%にすぎない。総有業人口に対する割合も1860年には約60%を占め、農業がまさに支配的な産業であったが、現在ではその10分の1にすぎなくなり、農工間不均等発展の事実が示されている。

1920年代を境に、農業従事者数は絶対的にも減少しだしたが、その理由は、第一に、フロンティア・ラインが1890年頃に消滅し、また西部の「自由な土地」

11) レーニン「新資料」109ページ。



も1920年頃までに消滅したために、耕地の拡大が制約されてきたからである。第二の理由は、(Ⅲ節で詳述するが)第一次大戦後、とりわけ1920年代における農業の急速なモーター化(motorization)の現象である。農業の機械化、急速な有機的構成の高度化は、土地拡大の制約とあいまって、農業従事者数の絶対的な減少へ導くこととなった。しかし、このような農業における有機的構成の高度化にともなう可変資本の絶対的減少は、農業の資本主義的發展とそれ自体なら矛盾するものではない<sup>12)</sup>。

では、農業従事者数は絶対的に減少しているが、そのなかに占める賃労働者<sup>13)</sup>と家族労働者の関係はどうであろうか(第2表)。最近20年間賃労働者数は減少してきているが、家族労働者の減少がきわめて激しく、農業従事者中に占める

第2表 賃労働者数の年次別変化  
(単位 万人)

年度	農業従事者数(A) =B+C	家族労働者数(B)	賃労働者数(C)	C/A
1945	1000	788	212	21.2%
1950	993	760	233	23.5
1954	864	658	206	23.8
1955	836	635	202	24.2
1956	782	590	192	24.6
1957	758	568	190	25.1
1958	753	557	196	26.0
1959	738	546	193	26.2

*Agricultural Statistics, 1960, p. 453, 651 表より作成。*

賃労働者の比重は一貫して増加しており、農業生産ではたす賃労働者の役割は年々大きくなっている。この事実、賃労働者の絶対数の減少にもかかわらず、全体としてアメリカ農業の内部に資本主義的關係が拡大しつつあるを思わせる。

ではこれを地域的にみればどうであろうか。賃労働者と家族労働者の関係をこの点で比較すると(第3表)、太平洋岸諸州が賃労働者の比率44%

で首位をしめ、なかでも集約的商業作物を栽培しているカリフォルニア州は57%で、農業労働の半分以上を賃労働に依存している。集約的な東北部のニュー・

12) マルクス「資本論」第3巻、青木書店版、896-897ページ。なお、この点については、二見明「現代アメリカ農業の構造」昭和40年、41-42ページ参照。

13) 1959年センサスでは農業労働者を常雇(regular hired workers, 年間150日以上雇用されている者)と季節雇(seasonal hired workers, 150日未満しか雇用されていない者)に分類し、両者を合せて賃労働者(hired workers)と呼んでいるが、ここでは賃労働者を中心に分析を進める。

イングランドは36%でこれにつづいている。さきに、近年最も農業生産の伸びの著しい地域として特徴づけた太平洋岸諸州の「先進性」の内容が、実は資本主義的發展における先進性であることがわかる。と同時に、かつてレーニンの時代に最先進地域であった東北部から、その地位を前者に譲ったことが示される。

これと対照的に、大内教授の論拠となった家族農場経営の本拠地中西部は12%で賃労働者がもっとも少ない。

さきの全国的趨勢と結びつけて考察する時、そこに導き出される結論はこうである。——農工間の不均等發展により、農業生産に雇用される賃労働者の総数は年々減少しているが、同時に、この過程で農業労働全体に占める賃労働者の割合は増加しており、総じてアメリカ農業では資本主義的關係は拡大している。そしてこの傾向は、太平洋岸諸州とニュー・イングランド、特に近年農業生産の成長の最も著しい前者において主導されている。

第3表 賃労働者の比重 (単位 万人)

地域		農業従事者数(A)	家族労働者数(B)	賃労働者数(C)	C/A
北 部	東北部	490	350	139	28.4%
	中西部	2365	2072	294	<b>12.4</b>
南 部		2752	1892	859	31.2
西 部	山地	293	198	95	32.4
	太平洋岸	406	227	180	<b>44.3</b>

1959年センサス, p. 308 より作成。

第4表 賃労働者および常雇の分布

販売額	農場数	賃労働者数	常雇数
総 数	100.0	100.0	100.0
I (4万ドル以上)	<b>2.8</b>	<b>35.1</b>	<b>46.9</b>
II (2万ドル～)	<b>5.7</b>	<b>17.3</b>	<b>19.6</b>
III (1万ドル～)	13.0	17.7	16.4
IV (5千ドル～)	17.6	13.4	8.9
V (2500ドル～)	16.7	8.3	3.9
VI (500ドル～)	<b>9.4</b>	<b>2.0</b>	0.5
その他	<b>34.9</b>	<b>6.3</b>	3.6

1959年センサス, p. 236 より作成。

## (2) 賃労働者の集積・集中

資本主義的關係の拡大傾向をさらに集積・集中の面から分析する。

〔経済階層別〕 まず最初に、経済階層別<sup>14)</sup>に賃労働者と常雇の集積・集中の状況を概観しておく(第4表)。農産物を4万ドル以上販売する少数の大経営(2.8%)に賃労働者全体(158.4万人)の35%、常雇総数(70万人)の47%が集中

しており、2万ドル以上販売するクラスⅠとⅡの農場(8.5%)には賃労働者の5割以上、また常雇の6割以上が集中している。逆に、総農場の4割以上を占める2500ドル未満の小農場では賃労働者総数の8%しか雇用しておらず、少数の大経営による賃労働者の大半の集中と、大経営の資本主義的性格を確認できる。

〔地域別〕 賃労働者の集積・集中の状況は、雇用人数別に各農場を検討すると一層明瞭になる。まず第5表で地域ごとの比較から始めよう。ここに示さ

第5表 各地域における農場と賃労働者の雇用人数別分布

労働者 地域		賃労働者を雇う農場および賃労働者数							*
		総数	0人	1人	2~4人	5~9人	10人以上		
合衆国	農場数	100.0%	85.2	8.2	4.9	1.0	0.6	24.4	
	賃労働者数	100.0	—	19.1	28.9	15.1	36.9		
北東部	農場数	100.0	77.0	13.2	7.8	1.2	0.7	21.1	
	賃労働者数	100.0	—	24.1	35.1	13.9	26.9		
中西部	農場数	100.0	88.0	8.7	2.9	0.3	0.1	20.1	
	賃労働者数	100.0	—	43.0	34.3	8.9	13.8		
南部	農場数	100.0	85.4	6.5	5.7	1.5	0.9	23.6	
	賃労働者数	100.0	—	12.4	28.1	17.7	41.8		
西部山地	農場数	100.0	79.4	11.0	7.0	1.6	1.0	25.1	
	賃労働者数	100.0	—	17.2	27.1	16.0	39.7		
太平洋岸部	農場数	100.0	77.9	10.4	7.9	2.0	1.7	28.5	
	賃労働者数	100.0	—	11.1	22.2	13.9	52.7		

1959年センサス, pp. 236-243 より作成。

\* 賃労働者10人以上雇う農場の一農場当り平均雇用人数。

- 14) 1959年センサスは、アメリカの全農場を「商業的農場 (commercial farms)」と「その他の農場 (other farms)」とに分類している。前者(241.6万農場)は農産物販売額2500ドル以上の農場、または販売額50~2499ドルで、経営主が65歳以下、経営主の農外労働日数が100日未満で、かつ家族の農外所得が農産物販売額より小さい農場をいう。この商業的農場は、農産物販売額によって、さらに6つの経済階層 (economic class) に分類されている。クラスⅠは販売額40,000ドル以上の農場、クラスⅡは20,000~39,999ドル、クラスⅢは10,000~19,999ドル、クラスⅣは5,000~9,999ドル、クラスⅤは2,500~4,999ドルまでの農場、クラスⅥはそれ以外の商業的農場である (1959 Census, pp. 1191-92 参照)。

れる第一の特徴は、全国農場総数のわずか0.6%を占める2.4万の大農場が賃労働者総数の37%を集中し、賃労働者を5人以上雇う1.6%の農場(6.2万)が賃労働者の半数以上を集中していることである。これを地域別にみると、西部の二地域(農場総数の9%)では、賃労働者の17%を集中しており、農場数に比して賃労働者の占める割合がもっとも高く、南部がこれにつづいている(44%の農場—54%の賃労働者)。農場総数の約40%を占める中西部は、賃労働者を19%しか雇用しておらず、賃労働者の果す役割は他地域にくらべて非常に小さい。さらに、雇用人数別に検討すると、太平洋岸諸州では10人以上雇う1.7%の農場が、賃労働者総数の半数以上(53%)を集中しており、これにつづくのが、少数の大プランテーションの存在する南部(0.9%の農場が42%の賃労働者を集中)と、粗放的資本主義経営の多い山地諸州(1.0%の農場が40%の賃労働者を集中)である。家族農場の多い中西部では、賃労働者を多数雇用する農場の比重が小さいが、この地域でさえ、5人以上雇用する農場(0.4%)が賃労働者の約4分の1(23%)を集中していることは重要である。さらに、州別に比較すると、一州で全国の賃労働者総数の9%を使用しているカリフォルニアでは10人以上雇用する2.8%の農場が賃労働者の58%、フロリダでは2.4%の農場が賃労働者の62%を雇用している。南部の大プランテーション農場の中心地ミシシッピーでは、わずか1.6%の農場が賃労働者の65%を集中している。

以上のように各地域、とりわけ集約的な地域において、少数の大経営者が賃労働者を完全に集中しており、これらの経営が資本主義的大経営であることは明白である。

第5表の示す第二の特徴は、10人以上雇用する農場では平均20~29人の賃労働者を雇っており——カリフォルニア州は30人、フロリダ州では31人——センサス資料をつうじても、アメリカ各地に資本主義的大経営を析出できる。

だが第三の特徴は、小規模な家族経営が典型的な中西部および零細経営の多い南部では、賃労働者を全く雇用しない農場が85~88%の多数にのぼることである。ことに中西部では97%までが賃労働者を全く雇用しないか、1人だけを

雇用する農場であり、賃労働者の4割以上が1人雇う農場に集中している。

〔農場の型別〕 地域別の考察につづいて、第6表で農場の型<sup>15)</sup>ごとに集積・集中の状況を検討しよう。

第6表 各農場の型における農場と賃労働者の雇用人数別分布

労働者		賃労働者を雇う農場および賃労働者数							*
		総数	0人	1人	2~4人	5~9人	10人以上		
商業穀作	農場数	100.0	85.0%	10.1	4.2	0.5	0.2	19.5人	
	賃労働者数	100.0	—	36.9	37.1	10.8	15.2		
商 綿 花	農場数	100.0	78.9	6.3	7.8	3.5	3.5	26.0	
	賃労働者数	100.0	—	4.5	15.1	15.7	64.7		
業 野 菜	農場数	100.0	67.4	8.4	11.4	6.1	6.7	35.6	
	賃労働者数	100.0	—	2.7	9.8	12.5	75.0		
物 果 物	農場数	100.0	63.7	13.6	13.3	4.9	4.5	24.8	
	賃労働者数	100.0	—	7.1	18.6	16.2	58.1		
畜 酪 農	農場数	100.0	76.1	15.2	7.6	0.8	0.2	18.5	
	賃労働者数	100.0	—	35.7	43.3	12.0	9.0		
産 肉 畜	農場数	100.0	81.8	11.8	5.4	0.7	0.3	18.7	
	賃労働者数	100.0	—	35.0	39.0	12.5	13.5		

1959年センサス、p. 269 より作成。

\* 賃労働者10人以上雇う農場の一農場当たり平均雇用者数。

まず第一に、商業作物における大農場の存在と顕著な賃労働の集積・集中である。綿花農場では10人以上雇う8,500の大農場(3.5%)が賃労働者の65%を集中しており、野菜農場は6.7%の大経営(1,470農場)が賃労働者の75%を、果物

15) 1959年センサスでは商業的農場(註14で説明)を、販売農産物を基準にして、次の12の型の農場に分類している——商業的穀作(Cash-grain)、タバコ、綿花、その他の畑作(Other field crop)、野菜、果物、酪農、家禽、肉畜(畜舎飼育)、牧畜(Livestock ranches、放牧)、普通作(General)、種々のもの(Miscellaneous)の各農場である(1959 Census, p. xxxv, pp. 1248-49 参照)。以下では叙述を簡明にするため、アメリカの代表的な6つの型の農場——商業的穀作、綿花、野菜、果物、酪農、肉畜——を中心に検討するが、この方法は、アメリカ農業の一般的傾向を把握するのには何ら支障とならない。

農場は4.5%の大経営(2,750農場)が58%を集中している。他方、大内教授が「最先進地域」と主張する中西部に多い粗放的な商業的穀作や肉畜農場では賃労働者を全く雇わない農場が80%以上を占めている。賃労働者を雇用する場合でも7割以上が1～4人雇う農場に集中している。しかし、家族経営の多い商業的穀作や肉畜農場でも、前者の850農場(0.2%)、後者の1,500農場(0.3%)が賃労働者を10人以上雇用しており、粗放的農場の中にも資本主義的経営の存在が確認できる。

また野菜や果物・綿花など商業作物の農場では、10人以上雇う農場の賃労働者の平均数は25～35人(最高は野菜農場の35.1人)で、大規模な資本主義的経営が存在する。

〔賃金支出額〕最後に、賃労働への支出額を基準に、賃労働者の集積・集中の状況を検討しよう。

まず経済階層別に一農場当りの賃金支出額をみると(第7表)、総農場の2.8%を占めるクラスⅠの大経営は、年間一農場平均12,800ドルの多額の資金を賃労働に支出しており、クラスⅡは平均2,300ドルを支出している。零細なクラスⅥの200農場の支出額を合計しても、クラスⅠ農場の平均支出額に及ばない。年間をつうじて、おもに賃労働に依存して農業生産を行う資本主義的経営と、ほとんど家族労働だけで生産を行う小経営との質的差異は明白である。ちなみに1959年センサスによると、年間賃労働に5万ドル以上支出する資本主義的大農場は4千、2万ドル以上支出する大農場は1万6千存在する<sup>16)</sup>。

第7表 経済階層別賃金支出額

	一農場当たり支出額 (ドル)
Ⅰ	12,806
Ⅱ	2,293
Ⅲ	800
Ⅳ	343
Ⅴ	177
Ⅵ	61

1959年センサス、pp. 1218-19より作成。

次に地域別に一農場当りの支出額を比較すると(第8表)、太平洋岸諸州が3,200ドルで他地域をしのいでいる。これにつづくのが集約的な東北部(1200ドル)と、粗放的資本主義経営の多い山地諸州(1500ドル)である。シェア・クロ

16) 1959 Consus, p. 346, 参照。

第8表 地域別賃金支出額

地域	支出額(ドル)		
	1農場 当り	1エーカー 当り	
合衆国	707	2.33	
北 部	東北部	<b>1,174</b>	<b>8.23</b>
	中西部	<b>355</b>	1.35
南 部	557	2.56	
西 部	山地	<b>1,462</b>	0.82
	太平洋岸	<b>3,184</b>	<b>8.02</b>

1959年センサス, p. 351 より作成。

アップーなど零細経営の多い南部と、家族農場の本拠地中西部、とくに後者の支出額はきわめて少く(355ドル)、太平洋岸諸州の9分の1にすぎない。集約的な地域と粗放的な地域の差は、エーカー当り支出額で比較すると一層はっきりする。さらに農産物別に比較すると(第9表)、野菜や果物など集約的な商業作物農場と粗放的な商業的穀作や肉畜農場は好対照をなしている。野菜と果物農場では一農場平均各々8,800ドル、5,100ドルを賃労働へ支出しているのに対し、商業的穀作と肉畜農場の支出は各々500ドル、550ドルで前者の10分の1前後にすぎない。これをさらにエーカー当りで比較すると、野菜農場は47ドル、果物農場は37ドルを支出しているが、商業的穀作と肉畜農場はともに1ドルにすぎず、前者とは全く比較にならない。

このように賃金支出額の分析をつうじて、資本主義的大経営、とりわけ高度に集約的な商業作物の大経営が賃労働者を集中し、資本主義的諸関係を拡大している事が実証された。

以上でアメリカ農業の進化の方向、性格の規定にとって決定的に重要な賃労働の分析を終えるが、以下のように結論を要約できる。

現代アメリカ農業は、レーニンの時代同様、農業における資本主義的諸関係を拡大しており、大内教授の見解とは逆に、年々農業生産に占める賃労働(=農業の資本主義化を示す標識)の役割は増大している。しかも、賃労働者の使用はますます大経営に集中しており、家族労働に依存する小経営との農業生産における格差は広がる一方である。さらに、この賃労働者の集積・集

さらに農産物別に比較すると(第9表)、野菜や果物など集約的な商業作物農場と粗放的な商業的穀作や肉畜農場は好対照をなしている。野菜と果物農場では一農場平均各々8,800ドル、5,100ドルを賃労働へ支出しているのに対し、商業的穀作と肉畜農場の支出は各々500ドル、550ドルで前者の10分の1前後にすぎない。これをさらにエーカー当りで比較すると、野菜農場は47ドル、果物農場は37ドルを支出しているが、商業的穀作と肉畜農場はともに1ドルにすぎず、前者とは全く比較にならない。

第9表 農場の型別賃金支出額

農場型	支出額		
	1農場 当り	1エーカー 当り	
商業穀作	<b>501</b>	<b>1.14</b>	
商業作物	綿花	1,396	7.05
	野菜	<b>8,843</b>	<b>47.32</b>
	果物	<b>5,138</b>	<b>36.59</b>
畜産	酪農	761	3.66
	肉畜	<b>545</b>	<b>1.41</b>

1959年センサス, pp. 1298-99  
より作成。

中は作物や地域により不均等である。とくに、集約的な商業作物を栽培し、多数の大規模経営を有する太平洋岸諸州（とくにカリフォルニア州）の集積・集中と近年の成長にはめざましいものがある。今や、現代アメリカ農業は、東北部にかわって「最先進地域」の地位を占めた太平洋岸諸州を先頭に、資本主義的發展の道歩んでいる。

### Ⅲ 機械化の進展と集約化

前節での賃労働の分析の結果は、アメリカ農業における資本主義的諸関係の発展と、大経営による賃労働の集積・集中の進行を明らかにした。ところで、近説は、機械化の進展とそれによる賃労働者の一層の駆逐を主張している。我々の三節の分析結果と機械の使用はどうかかわっているのだろうか。本節では、農業の集約性を示す機械および肥料を指標として分析を行う。

#### (1) 機械使用の増大<sup>17)</sup>

アメリカでは南北戦争後、農業の機械化が急速に進行し、世紀の交代期頃までには蒸気トラクターが発明され動力源は畜力から蒸気力へ転換し始めていた。しかし、蒸気力の時代にはその利用に大きな制約があり、畜力がまだ支配的であったが、第一次大戦後のガソリン・トラクターの出現は事態を一変させた。「価格は蒸気機関よりもはるかに低廉になり、操作が容易になり、蒸気動力の適用がまったく不可能な地形や作物に応用しえたからである」<sup>18)</sup>。

第一次大戦後、とくに1920～30年代における農業のモーター化(motorization)の急速な進展の事実を統計資料から確認しよう(第10表)。トラクターは、1910年の1,000台から1930年の92万台、1950年の339万台をへて、1959年には475万

17) この節で機械使用について考察する際、次の2つの点について留意しておかねばならない。第一に、農業機械は作物や作業内容によって技術の発展段階が非常に異なり、機械化一般を論じることはできない。第二に、農業センサスでは農業一般で共通に使用される機械、とりわけ穀物や飼料作物の生産に使用する機械(穀物コンバイン、コーン・ピッカーなど)は記録されているが、各作物に特有な機械——これは商業作物に多い——は全く記録されていないため、機械使用の程度を正確に把握することはできない。

18) Harold Barger and Hans H. Landsberg, *American Agriculture, 1899-1939: A Study of Output, Employment and Productivity*, 1942. 馬場啓之助・山口辰六郎訳「アメリカ農業の成長分析」昭和32年、174ページ。



台と約5,000倍,自動車は1910年の5万台から1959年の426万台へ約100倍,穀物コンバインは1,000台から106万台へ約1,000倍,搾乳機所有農場は50年間に1.2

第10表 農業機械使用台数 (単位 1000台)

	トラクター (1)	貨物自動車	自動車	穀物コンバイン	コーン・ピッカー	搾乳機 (2) 所有農場
1910	1	0	50	1	—	12
1920	246	139	2140	4	10	55
1930	920	900	4135	61	50	100
1940	1567	1047	4144	190	110	175
1950	3394	2207	4199	714	456	636
1955	4345	2701	4258	980	688	712
1959	4750	3060	4260	1060	760	725

Agricultural Statistics, 1959, pp. 444-445, Table 642-646, 二見昭「現代アメリカ農業の構造」p. 44, 6表より作成。

(1) ガーデン・トラクターは除く, (2) この項のみ所有農場数。

万農場から約73万農

場へ60倍化と驚異的な発展を示している。

ここにみられるとお

り, 最近数十年間,

アメリカ農業は全般

的に機械化が進展し,

農業生産における機

械の役割はますます

大きくなっている。

〔経済階層別〕 1959年センサスが機械化について示す最も特徴的なことは, その進展過程で機械の集積・集中が進んでいることである。まず第11表で, 経

済階層別にこの点の状況をみてお

こう。農場総数の8.5%を占めるク

ラスⅠ・Ⅱの大経営が, トラクタ

ー総台数のちょうど20%, 貨物自

動車や穀物コンバインの20%前後

を使用している。牧草刈取機の場合

は3割までが少数のクラスⅠ・

Ⅱ農場に集中している。他方, 販

売額2500ドル未満の44%の農場

(クラスⅥおよびその他の農場)は,

トラクター総台数の2割, 穀物コンバインにいたっては1割を使用しているにすぎず, 少数の大経営への農業機械の集中が進んでいる。

しかし, さらに立ち入って検討すると, 機械化の程度は地域や農産物により,

第11表 農業機械の経済階層別分布

	トラクター (1)	貨物自動車	穀物コンバイン	牧草刈取機
総農場	100.0	100.0	100.0	100.0
Ⅰ	8.4	9.8	6.5	10.7
Ⅱ	11.6	11.1	12.8	19.0
Ⅲ	21.7	18.8	27.4	33.6
Ⅳ	22.8	19.4	28.1	23.8
Ⅴ	15.2	14.3	15.0	8.4
Ⅵ	4.4	5.5	2.9	1.2
その他農場	15.8	21.1	7.6	3.3

1959年センサス, pp. 1214-15 より作成。

(1) ガーデン・トラクターは除く。

また農作業の種類によって大きく異なっていることがわかる。最も早くから、しかも完全な機械化が進んでいるのは、アメリカ穀倉地帯における播種および刈取作業の分野である。とりわけ、小麦その他穀物の単一栽培を行っているグレート・プレーン(Great Plains)の広い、平坦な地帯は農業機械の導入に理想的である。現在では、小麦その他の穀物やとうもろこし、乾草などの飼料作物は、機械でほとんど全生産工程を処理することが可能である。他方、野菜や果物・綿花・タバコなど商業的な作物においては、機械化は一部の工程に限られている<sup>19)</sup>。農業では機械の発展段階は作物によって著しく異なっているのである。

〔地域別〕 この点について、センサス資料で地域別に農業機械の分布を比較しよう(第12表)。一見してわかるように、中西部(農場総数の39%)が圧倒的に機械を利用している。コーン・ベルトとウィート・ベルトを含むこの地域は、トラクター総台数(468.8万台)の53%、穀物コンバイン(104.2万台)の70%、コーン・ピッカー(79.2万台)の84%を集中している。また搾乳機を所有している農場(66.6万農場)も6割

以上がこの地域にある。中西部について機械化の進んでいるのは、商業的農業の進んでいる東北部と西部の二地域である。前者(農場総数の6.8%)はトラクターの8%、搾乳機所有農場の16%、後者

第12表 機械台数の地域別分布

地域	機械	トラクター <sup>(1)</sup>	貨物自動車	穀物コンバイン	コーン・ピッカー	搾乳機所有農場 <sup>(2)</sup>
合衆国		100.0	100.0	100.0	100.0	100.0
北東部		7.9	7.7	4.7	3.9	16.1
中西部		52.6	38.7	69.9	83.7	62.8
南部		28.1	36.9	17.2	11.4	12.4
西部	山地	5.5	7.9	5.3	0.7	4.2
	太平洋岸	5.7	8.5	2.9	0.2	4.5

1959年センサス, pp. 211-219 より作成。

(1) ガーデン・トラクターを除く, (2) この項のみ所有農場数。

(農場総数の9.2%)は、トラクターの11%、貨物自動車の15%を集中している。零細経営の多い南部は最も機械化が遅れており、農場数(農場総数の44%)のわりに機械は少ない。トラクターの28%、コンバインの17%、コーン・ピッカーの11%を集中しているにすぎず、南部の約半数の農場はトラクターを全く所

19) バーガー, ランスバーグ, 前掲訳, 186-187ページ。

有していない。

機械化の進展の相違は、農場の型別に比較すると一層はつきりする<sup>20)</sup>。生産工程が比較的単純で機械化の容易な穀物や飼料作物の生産において機械の利用はもっとも進んでおり、商業的穀作・肉畜および酪農の三つの型の農場が農業機械の大部分を使用している。すなわち、農場総数の約4割を占めるこの三つの型の農場が、トラクター総台数の69%、貨物自動車の62%、穀物コンバインやコーン・ピーッカーの8割以上を使用している。他方、生産工程の複雑な商業作物においては、その使用に技術的な限界がある。

ここまでの分析では、賃労働者の使用が少なく、機械化のもっとも進んでいる穀倉地帯—中西部をアメリカ農業の最先進地域と規定し、機械化の進展は賃労働者を駆逐するという最近の見解が、一見、正しいように思われる。しかし、地域や農場の型ごとに機械の集積・集中の状況を検討すると、事態は一変する<sup>21)</sup>。

まず第13表で、トラクターの所有台数別に各地域を比較する。穀倉地帯の中西部では87%の農場がトラクターを所有しており、機械がもっとも普及している。しかし、5台以上所有する大経営は、わずか1.7%であって、総台数の6%を所有しているにすぎず、他方、1～2台所有の農場が全体の67%という多数を占めている。これに対して、農業の資本主義化がもっとも広範に進んでいる太平洋岸諸州では、5台以上所有する4.1%の農場が、総台数の22%を、4台以上所有する7.2%の農場が31%以上を集中している。太平洋岸諸州についてトラクターの集積・集中が進んでいるのは、粗放の大経営の多い山地諸州で、5台以上所有する4.6%の農場が17%のトラクターを集中しており、少数の大プランテーションのある南部や集約的な東北部がこれにつづいている。州別にみると、集約的・商業的農業のさかんなカリフォルニア州とフロリダ州ではトラクターを5台以上所有する農場が、各々トラクター総台数の32%、23%を集中し、かつ

20) 1959 Census, pp. 1292-95.

21) ここではアメリカ農業で最も一般的に利用されているトラクターを例にとる。

第13表 各地域における農場とトラクターの所有台数別分布

地域	トラクター	トラクター使用農場およびトラクター数					
		総数	0台	1~2台	3台	4台	5台以上
合衆国	農場数	100.0%	30.3	56.7	8.7	2.6	1.7
	トラクター数	100.0	—	62.2	20.6	8.3	9.0
北東部	農場数	100.0	20.9	62.9	10.6	3.5	2.1
	トラクター数	100.0	—	60.1	21.6	9.5	8.8
中西部	農場数	100.0	<b>13.2</b>	<b>67.2</b>	14.2	3.7	1.7
	トラクター数	100.0	—	<b>60.2</b>	25.2	8.8	5.8
南部	農場数	100.0	47.6	46.8	3.2	1.2	1.2
	トラクター数	100.0	—	71.3	12.1	6.0	10.6
西部山地	農場数	100.0	20.0	56.4	13.4	5.6	<b>4.6</b>
	トラクター数	100.0	—	46.8	23.1	<b>12.9</b>	<b>17.2</b>
太平洋岸部	農場数	100.0	29.6	55.9	7.3	<b>3.1</b>	<b>4.1</b>
	トラクター数	100.0	—	52.8	15.8	<b>9.0</b>	<b>22.4</b>

1959年センサス, pp. 216-17 より作成。

そのプランテーション農場の中心地ミシシッピ州でも24%を集中している。

〔農場の型別〕 大経営によるトラクターの集積・集中は、農場の型別に検討すると一層明白である(第14表)。粗放的な商業的穀作と肉畜両農場では87~93%の農場がトラクターを所有していて、一般に機械が普及している。しかし、その集積・集中度は低く、5台以上所有する農場(前者で3.3%, 後者で2.4%)の所有比率は、それぞれ総台数の10%弱、8%にすぎない。これに対して、商業作物、とりわけ高度に集約的な野菜、果物両農場や、大プランテーションをもつ綿花農場では、大経営によるトラクターの集積・集中が著しい。野菜農場は、5台以上所有する農場が1割以上(12.3%)もあり、この階層がトラクター総台数の42%を集中している。さらに、4台以上所有する約2割の野菜農場が総台数の半数以上(54%)を集中している。野菜農場につぐのは、綿花・果物農場

第14表 農場の型による農場とトラクターの所有台数別分布

トラク ター 農場の型		トラクターを使用する農場とトラクター数						
		総 数	0台	1~2台	3台	4台	5台 以上	
商業穀作	農 場 数	100.0%	<b>6.5</b>	65.7	18.8	5.7	<b>3.3</b>	
	トラクター数	100.0	—	51.6	27.4	11.2	9.8	
商 業 作 物	綿 花	農 場 数	100.0	<b>42.2</b>	45.5	6.0	2.6	3.7
		トラクター数	100.0	—	51.8	15.4	9.0	<b>23.8</b>
野 菜	農 場 数	100.0	<b>15.8</b>	50.3	14.3	7.3	<b>12.3</b>	
	トラクター数	100.0	—	29.1	17.2	11.7	<b>42.0</b>	
果 物	農 場 数	100.0	22.9	61.0	8.7	3.3	4.1	
	トラクター数	100.0	—	54.3	17.3	8.9	<b>19.5</b>	
畜 産	酪 農	農 場 数	100.0	7.7	70.8	16.3	4.2	1.7
		トラクター数	100.0	—	59.5	26.3	8.9	5.3
肉 畜	農 場 数	100.0	12.8	65.1	15.2	4.5	2.4	
	トラクター数	100.0	—	55.9	25.7	10.2	8.2	

1959年センサス, p. 1277 より作成。

で5台以上所有する農場総台数の19~24%を集中している。

トラクターの所有台数別に分類した二つの表からえられる結論はこうである。大内教授が最先進地域と規定した中西部の穀倉地帯では、農業機械は最も普及しており、使用台数は非常に多い。しかし、機械の大部分は1~2台の機械を所有する小経営に分散しており、大経営による機械の集積・集中はあまり進んでいない。他方、商業作物は、農作業の単純な穀物や飼料生産にくらべて、一般に機械化が技術的に困難であるが、大経営による機械の集積・集中は強力に進行している。

以上で農業の集約性を示す機械の分析を終えるが、結論は次のように要約できる。

最近数十年間の農業機械のたゆみない前進を前に、大内教授は作物により異

なる機械化の発展段階と機械の普及程度にだけ注目し、中西部の穀物生産がアメリカ農業の「標本」であり、今後、アメリカ農業全体が進むべき方向であると主張される。しかし、この過程で同時に進行する農業機械の集積・集中という面からみると、粗放的な飼料や穀物のそれはきわめて弱く、集約的・商業的作物の方がはるかに顕著である。前節で実証済みの賃労働を大経営に集積・集中する商業的作物は、機械においても最も集積・集中がいちじるしい。とくに、近年、農業生産の急速に成長している太平洋岸諸州は、賃労働においても、機械においても、集積・集中がもっとも顕著であり、少数の大経営は両者を最大限活用し、資本主義的發展の道を歩んでいる。現代アメリカ農業では賃労働者と機械の使用は互に排除しあうものでなく、大経営では両者の集積・集中は同時に進行しており、アメリカ農業の発展につれて、両者の果す役割はともますます重要になってきている。現代農業では、機械は一般に資本主義的に使用されているのであり、機械化の進展とともに、農業の資本主義的諸関係はますます拡大しているのである。

## (2) 肥料使用の増大

機械とともに農業の集約性を正確に表現する肥料の分析にうつろう。

肥料、とくに購入肥料の使用量の増加は、近年いちじるしい。半世紀間（1910—1960年）に555万トンから2,532万トンへ約5倍化、最近28年間でも約3倍半増加しており<sup>22)</sup>、アメリカの農業生産全体の集約化、単位面積当りの肥料投入量の急速な増加を示している。

〔経済階層別〕 まず経済階層別に肥料使用量を考察すると（第15表）、クラスⅠ・Ⅱの大経営（総農場の8.5%）が総使用量の37%を、とくにわずか2.8%のクラスⅠ農場が総量の2割以上を使用している。他方、総農場の6割以上を占めるクラスⅤ以下の零細農場は総量の4分の1しか使用していない。一農場当りの投入量でもクラスⅠは57トン、クラスⅡは20トンで零細農場の使用量とは雲泥の差がある。

22) 二見昭、前掲書、44ページ、第7表。

〔地域別〕 ついで、地域別に肥料使用量を比較すると(第16表)、一農場当

第15表、経済階層別肥料使用量

	一農場当 り使用量	百分比
総農場	8.3 <sup>トン</sup>	100.0
I	56.5	21.4
II	19.7	15.8
III	11.7	21.5
IV	7.5	17.6
V	5.3	11.4
VI	3.1	3.8
その他 の農場	2.6	8.4

1959年センサス、pp. 1216-1217 より作成。

第16表 地域別肥料使用量

地域	肥料	肥料使用量	
		一農 場当 り <sup>(1)</sup>	1エー カー <sup>(1)</sup> 当り
合衆国		8.3 <sup>トン</sup>	297 <sup>ポンド</sup>
北東部		9.8	489
	中西部	7.5	204
南部		7.9	407
西部	山地	9.5	205
	太平洋岸	16.1	316

1959年センサス、pp. 328-29 より作成。(1)ただし、肥料使用農場および使用面積の平均。

りの使用量では商業作物の多い太平洋岸諸州(16.1トン)が他を凌いでいる。集約的な東北部(9.8トン)と、綿花・タバコ・野菜・果物など肥料を大量に投ずる作物の多い大西洋岸南部諸州(11.0トン)がこれにつづいている。

州別にみると、集約的作物の多いフロリダ(31.8トン)、カリフォルニア(22.9トン)と、都市近郊のニュー・ジャージー(22.3トン)の諸州で大量に使用されている。次に、エーカー当りについてみると、大西洋岸南部諸州(568ポンド)と東北部(489ポンド)での肥料使用は最も資本集約的である。粗放的大経営の多い山地諸州では、一農場当りの使用量は多いが、エーカー当りでは非常に少ない。他方、粗放的でしかも小規模な家族経営の多い中西部では、一農場当りでも(7.5トン)、エーカー当りでも(204ポンド)、使用量はきわめて少ない。とくに、中部北西諸州ではエーカー当り150ポンドと全国最低である。

〔農場の型別〕 最後に、農場の型別に比較すると、肥料使用量の諸特徴が一層顕著に示される(第17表)。高度に集約的な野菜・果物農場では、一農場平均20~36トン、エーカー当りでは738~749ポンドの肥料を使用し、完全に他の農産物を圧倒している。粗放的な商業的殺作や肉畜農場では、エーカー当りの肥料使用量は185~245ポンドにすぎず、高度に集約的な農場、とくに野菜農場の3分の1にもみたない。

肥料にかんする以上の分析から明らかなように、肥料使用量は年々増加して

第17表 農場の型別肥料使用量

農場の型	肥料	肥料使用量	
		一農場 当り	一ユーカ ー当り
商業穀作		12.2 <small>トン</small>	<b>185</b> <small>ポンド</small>
商業作物	綿花	8.7	307
	野菜	<b>36.3</b>	<b>749</b>
	果物	<b>20.4</b>	<b>738</b>
畜産	酪農	7.7	291
	肉畜	9.3	245

1959年センサス, pp. 1290-98  
より作成。

おり、農業生産は全体としてますます集約的に発展している。とくに、最近急速に成長している商業作物は最も大量に肥料を使用しており、商業作物の資本集約的な特徴を浮き彫りにしている。また、賃労働を大量に集積している資本主義的経営に、肥料の使用は集中しており、集約的な指標として先に検討した機械と同様の傾向をもつことが確認できる。